

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第5回）「体力の向上」部会 要点録

| | | |
|------|-------------------------------|--|
| 開催日時 | 平成21年9月25日(水) 午後3時30分～午後5時30分 | |
| 会場 | 練馬区役所東庁舎3階 301号室 | |
| 出席者 | 委員 | 米津光治、赤木宏行、杉原 昇、宮野いずみ、難波民雄、工藤智昭、本間章朗、畑 陽子、高橋健司（敬称略） |
| | その他 | 教育出版 |
| | 事務局 | 渡辺浩一 指導主事 |

1 挨拶

アドバイザー

そもそもこの体力の向上は、昭和60年代から低下傾向に歯止めがかかっていない状況の中で、あえて練馬区がこの問題解決のために小中一貫教育の中で指導資料を作っていくということ。その難しさの一つは、学校教育、学校体育だけでは解決できない問題、丸ごと子どもの生活を捉えながら学校としてどうしていくかを考えなくてはいけないので、大変守備範囲が広い。第4回では、かなり具体性が出てきた。さらに今日は充実した話を期待している。

事務局

本日の配布資料について。次第と前回の要点録、「1年次の報告書」プロット案、小中一貫教育校だよりの第2号、現在他の部会、キャリア教育の部会で作成しているマトリックス。本日お持ちの資料をどう文言として入れ込むかも話し合いを進めていければ。まずは資料の確認と、重視する指導項目をどう立ち上げるか。最終的にはこの案に沿って役割分担までいけたら。

2 協議

委員

それぞれが作ってきた体力の向上育成カリキュラムについて説明していただきたい。

委員

何を載せることでこの資料の活用度が出てくるか。目指す児童像、生徒像だが、例えば健康にかかわる保健とか、食育、クラブ、部活動なども含めたものをこの中に入れるのか。それぞれ包括的な児童・生徒像にするのか、いろいろ重視する指導項目の中で具体的に挙げていったほうがいいのか。一応ここでは白丸が運動、星が運動に対する興味関心。それから黒が小学校と中学校の食に関する具体的な内容を入れてみた。それから体づくり運動は、それぞれⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期とも共通した内容が入るので、具体的な運動例を示した方がいい。クラブ・部活動は、具体的に活動する場合、同一時間で一齐にやるのか。場所の関係で難しい。そのへんはどう運営をするかも共通に話しておかないと。学校行事は運動会、体育にかかわる集会とか、それぞれ共通のところがある。小学校だと連合水泳記録会、中学校だと陸上競技大会等。食については毎月19日を食育の日にして取り組むところもある。保健は、小3、4ぐらいから具体的な目標を入れた。その他、学校教育だけでは体力の向上は難しいから、家庭・地域との連

携に学校でできるようなことで、学校だより、保健だより、給食だより、給食紹介等の啓発活動。あるいは地域でのスポーツ少年団。サークルに所属するとか、家族でジョギングとか、学級ごとの運動遊びをやってみるとか、そういう共通で入ってくるところがあるのかと。

委員

体づくり運動については、学習指導要領に書かれている文言を整理しながら、ねらいとなる部分を三つに分けて書いた。それから、クラブ活動・部活動については、4、5、6年生から行っている、特別活動の中のクラブ活動のねらいについて書いた。学校行事については、この中に重点になっていたり、体力向上という視点でねらいや具体的な活動が入ってくると思うが、この枠の中に入りきらなくなってしまったので、今回は項目だけにした。保健・食育に関しては、主に食育のねらいの部分を書いた。教科・領域、その他の体験活動に関連しているものも、低・中・高学年に分けた。その他は課外活動で、ここには体力テストの活用とか、それを家庭へ返して日常の活動にしていこうというところが入ってくると思った。

委員

体づくり運動は、1、2年生は1人で行う運動。いろいろな状況での身体操作がまず大事。3、4年生になるとそれプラス、用具の動きに合わせてとか、バランスを取りながら操作とか、複合した動きが出てくる。それから低学年は鬼遊び等々、集団遊びを通しての体づくり運動が大事。Ⅱ期は、いろいろな用具を使った運動と、持久的なものが出てくる。体ほぐし運動もⅠ期から入るだろうが、特にここでやるということを入れた。Ⅲ期は、中学生は動きを持続する能力を高めるのに適しているということだが、まだ入れていない。学校行事は、本校で今やっているもの、またはやってきたものを入れた。ふれあい学級遊びという、ほかの学年・学級との遊びを月に1回やっている。そのときに伝承遊びやニュースポーツなどを取り入れるといいのではということを入れた。あとは、なわとび月間、マラソン月間、一輪車等の検定もやったことがある。それから発育指導、歯の衛生週間。交流給食、給食時の食育指導。体育朝会等がある。保健については項目しか書いていない。その他に食育が入る。今学校でやっているもので、1、2年の生活科でミニトマト作りやサツマイモの栽培をしている。総合的な学習の時間として、健康について自分たちで調べていく取り組み。それから、昔の遊びや興味を持った遊びを調べて、学級・学年でやってみること。学級オリンピックということで、それぞれ種目に挑戦していく取り組み。野菜を育てようという取り組み。高学年になって、総合でお米作り、理科でジャガイモづくり等を行っているので記入してみた。

委員

学習指導要領を見ながらまとめた。中1から中2、中3の体づくり運動で特に確認しておきたかった言葉が「体ほぐし運動」と「体力を高める運動で構成」。それを白丸でポイントとして置いた。その中で中学校では「心」も文言に入れて、これから押さえたい。あとは学習指導要領にかかわるところをピックアップしているので、必要な文字を抜いていけばいい。クラブ活動では責任感、または連帯感という言葉を用いたい。学校行事のところ、本校では運動会や球技大会、または学年ごとに大なわとび大会などを行っている。スポーツテストは学校全体の行事として行われている。練馬区の中学校では連合陸上、連合ダンス、保護者が開催して

いる駅伝等が行われている。食育については保健のところでは記入したが、家庭科の学習指導要領も見て記入した。

委員

小学6年ぐらいまでを考えた。体づくり運動について、練馬区の体力調査を基にした体づくり運動の中で、どんな動きを重点に取り組みたいのか。Ⅰ期は体ほぐし運動と、多様な動きを作る運動遊びということで、走力・敏捷性を高める運動。それから投力を高める運動として、ボールを操作する運動遊びを取り入れることで、体力向上、体づくり運動の部分で高めていけるのではないかと。Ⅱ期では、体ほぐし運動と同時に持続力を高める運動。持久力が課題にあったので、なわとびランニングとかペースランニングなどもいいのか。それから瞬発力を高める運動も、体づくり運動の中で取り組むということで、ケンケンリレーとかビーチフラッグ等も書いた。クラブ活動・部活動だが、クラブ活動は4年生より現行実施しているということで、運動系クラブの確保をなるべく多く。それから指導者の確保、用具、場所の整備をすることでクラブ活動の充実が図れて体力向上につながる。学校行事は、今やっているものを挙げた。運動会、運動集会、球技大会など。各行事の中で、競技や演技の工夫、練習のやり方、集会を伝統的に根付かせること等を工夫していけば体力向上にもつながっていく。それから今回は食育を重点に書いた。保健は指導要領にもあるので。保健の食育は、本校の食育全体計画の目標をいじって書いた。Ⅰ期については4観点で、食べ物に興味関心を持つこと。食事の正しいやり方を覚える。それから食べ物の働き、三つのグループに分かれる。それから好き嫌いをなく食べることが健康な体を作ることを理解するということが、これも保健とのタイアップだと思う。それからⅡ期は、食生活に関心を持ち、バランスの取れた食事の大切さを理解すること、食事を通して豊かな好ましい人間関係を育てるということで、こちらは保健、家庭科などのタイアップでやるのかということ。

事務局

キャリア教育のカリキュラム案と、1年次の重視する指導項目は前回と変わっている。今回の資料はキャリア教育部会が今作成しているもの。

委員

そうすると、町田市の資料は具体的に単元とか指導時数なども入っているが、こちらは単元名とか具体的にどんな体験をするかという内容をまとめるのか。重点についてこれから話し合うが、例えば運動にかかわるようなこととか、学校行事とか保健とか、クラブ活動とか、そんなところからはぐくみたい能力というか。

事務局

どういう力をはぐくんでいくか、伸ばしていくか、重視する指導項目を本部会である程度絞る。今挙げた項目を参考に、重視する指導項目で文言を絞り込んでいく。例えばカテゴリの中にどこでリンクするか。クラブ活動とか部活動は、ある程度自分の意思で選択できるもの。これが親しむ態度に入るとか、まずどういう力をはぐくんでいくかという重視する指導項目を立てられたらと考えている。今回のこの体力向上の部会で部活動を取り入れていくことは、部会

の最初でも大きく取り上げられていた。特に小5から部活動の参加をスタートさせるという提示はなかったが、このあたりいかがか。クラブ活動はだいたい4年生から始まるのか。発達段階もふまえてとなるが、中学校の部活動で小5、小6の子がそこにいる想定ではどうだろうか。例えば体力向上という面から好影響はあるだろうかというところ、意見を伺いたい。

部長

体力ということを考えたとき、中学校ではやはり部活動の存在は取り除くことができない大きな要素である。学校体育の中でも、中学校の生徒全般的に体力を高めるための工夫はしているが、やはり専門的なスポーツの技能やスキル面、それから友達同士の人間関係や規律、そういう精神面でもある程度効果がある。せつかく小中一貫教育で体力を考えるなら、私は小学校高学年から部活動への取り組んだ方が、前向きな姿勢と捉えられるのではないか。

委員

小学校だとクラブ活動を4年生から始めるということで、3年生がクラブの見学と体験入部みたいなものがある。それを考えると4年生も少し体験的なものも入れて、徐々に部活動に移行するという考え方もできると思う。小学校のクラブと中学校の部活動のつながりを考える。

アドバイザー

小学校のクラブ活動は、現実的にどのくらい時間数を取っているか。

委員

20回。45×20。区内でだいたい同じぐらい。

部長

中学はクラブ活動はない。

アドバイザー

かつて中学校でクラブ活動と部活動の両方が存在した時期があって、そのときに代替があった。部活動に出たことでクラブに出たとみなす。もしそれが可能だとすれば、小学生が中学校の部活動に出たことでクラブに出たとみなすことも方法としては考えられるかもしれない。

部長

小学校から中学校に移行する段階での発達段階もふまえて、5年生はクラブ活動、6年生は部活動に参加することでクラブ活動代替というように移行することも考えられる。

アドバイザー

心配しているのは、クラブ活動も部活動もそうだが、異年齢の集団ということが特徴としてある。その場合に、5年から部活動となると4年生だけ切り離された単独の学年のクラブになる。今提案いただいたような、例えば4、5年は小学校で、6年は中学と交流しながらというスタイルだったら可能性はあると思う。

委員

I期、II期、III期で分けるのであれば、II期からスタートしてもいいのかと。中高一貫だと明らかに中学高校と部活はある。だから、初めてのスタートなので、試行的にII期から部活動をやることの意義はあると思う。ただ整備しなければいけないこともある。激しさとか強度の問題、下校問題はどうか。いろいろクリアしなければいけないが、5、6年ならば運動好きな子どもで週3回とか。今のクラブは週1だが、それより多い回数でやるなら可能だと思う。ただ、条件として校内整備の指導者とか、そういう体制をとらないといけないので、十分な準備をしていけば、いい目玉になるのではないかと。5、6年でやりたいと思う子もいると思う。

委員

5年生から部活動にしてしまうと、クラブ活動のねらいとちょっと違うと思う。クラブ活動は教員が引っ張っていくのではなく、自分たちで計画してやっていくところがある。部活はどちらかというと教員が指導している感じがあるが、それはまたちょっと違うのか。

部長

その違いはなかなか言いにくい。中学校の部活動は学校体育と切り離されているので、運動系の部活動については、一つのスポーツとしてその能力を高めていくところがある。そういう意味では、指導者が中心になって、その技術指導に子どもたちがついていくことになる。指導者、部活の顧問の方が指導のカリキュラムを年間通じて作って、日々の練習や対外試合、そして最終的には公式戦で勝つか負けるかでつながってくる。

委員

クラブ活動について、小中の連携を現実的に考えていた。田柄小と田柄中でできるかと考えたときに、子どもの興味・関心が、中学校の部活動を体験してみたいとか、中学生のお兄さんお姉さんたちに教えてもらいたいとか、そんな縦のつながりがよりよくできるというイメージは湧く。ただ、実際にどうやってクラブ活動の時間だけ、年間で交流ができるのかという難しさが頭に浮かぶ。小学校の特活の中でのクラブ活動は、子どもたちの自主性とか社会性とか教え合いが大きなねらいになっている。だから皆が運動系のクラブ活動を選ぶわけではない、今話されている小中の連携は、運動を中心に話しているのか、それともクラブ活動の連携は文化系や科学系のことも小中一貫として話題に上がっているのか、どちらなのか。中学校との連携は6年生の子たちに運動系を選択させて、体験してみたいところをとっているのか。

部長

基本的に部活動は子どもたちの自主性に委ねる。必ずしも全員が加入するわけではない。あくまでも子どもたちの自主性に委ねて、運動系であれ文化系であれ、部活動に入る子どもと入らない子どもがいると思う。今回の場合、小5、6に部活動を必修クラブの取扱いでやるとすれば、当然全員参加が基本になる。そのときに、必ずしも体力部会だから運動系の部活動に全部入る必要はないと思う。やはり文化系の部活動もあり、どれでも好きなところに入るというかたちで、クラブ活動の代替を6年生で図っていく。それで体力向上の考え方は、運動系に入

子どもたちに特定していくことになるが、それは仕方ないのではないか。例えば、体力向上の中で、地域とのかかわり等も視野に入ってくる。それは必ずしも全員ではない。ある程度意欲を持っている子どもたちを対象にするだろうし、その子どもの数が多くなるほど、学校全体の教育カリキュラムとしては大きい。そして本部会に関しては、運動系の部活動に入っている子どもたちに関して、内容に触れておく程度でいいのではないか。

委員

もしも、小6が部活となるとすると、クラブ活動としての小4、5はそのまま残るのか。

委員

今の練馬区のだとそれで通らないと思う。クラブはやってもやらなくてもいいとなっているが、4、5、6年でやることは規定路線。だから4、5、6年は週1プラス、部活動は放課後の扱い。6年が任意で参加するという程度で、それが強制ではない。部活に入ったからクラブ活動をやめるのではなく、例えば部活動に入って、クラブは文化系に入る子もいるかもしれないし、部活の体験をして体力向上ということもあるかもしれない。せっかく小中一貫なので、やはり中学校と部活動での交流もリンクさせることはいい。

部長

基本的に部活動はカリキュラムの中に入っていない。小中一貫教育の特別な企画として、教育委員会がどう捉えてくれるかもあると思うが、ある程度連携していくとすれば、そこは強調して6年生を必修的に部活動に入らせて、はぐくむという考え方もいいのではないか。せっかく一貫教育という名前の下で立ち上げるならば、柔軟性を持ってもらいたい。

委員

小学校の学習指導要領を変えないと言っている。これを逸脱しない範囲で小中一貫をやるのだから、クラブはやらなければいけない。それから学年も前後させてはいけない。その中でやりなさいと言っている。特区申請も何もしていない。6年生でクラブをやめて部活はできない。年間35回からなければいけない。そういうふうに解釈をしないと間違えてしまうのでは。

委員

例えば6年生をやるとするなら、クラブ活動は年間20回、3×20回。

部長

そういう時間数を、放課後の部活動に参加したことで代替すると認めてくれるならば。

委員

区によっては10回とか、許容範囲は違う。練馬区は共通して、年間45×20で900時間。

委員

一時期クラブをやらなくてもいいという方向があって、区によっては10回にしているところ

るもある。ただ、練馬区が今、そういう方針。小中一貫を練馬区ではどう考えるかとだと思ふ。

委員

共通の考え方は、区から明示されていない。ただ個々に指導主事の先生方に相談をし、許可をされているので、基準線は何もどこにも書いていない。

部長

ただ、小中一貫教育のメリットを最大限に出して、部活動の移行が体力向上に関してやはり有効だとこの部会で判断できて、それを進めたいという気持ちがあるなら、教育委員会に提言してもいいのではないかと。あくまでも基本は基本として捉えて、こういう考え方もできるし、体力部会としては非常にメリットがあると判断できるなら。

委員

現実的なことから。桜小で6年生が部活動を始めた。一番問題になるのが安全面。10月は交流週間みたいなものがもともとあったので、それを利用してやるが、11月からは正式に希望を取って親の了解を取り、保険をかける。もう一つは、下校時刻。部活動は6時ぐらいまでやっている。小学校は6時では遅いので、4時から5時までの1時間というふうに立ち上げている。下校は親に原則迎えに来てもらう、でも迎えに来られない親はどうするのか。小学校で部活動をやるとそのへんが大変だ。それから運動面では、悪い言い方をすれば小学生が中学生のお荷物になってしまう。体力もスピードも違うが果たしてどうなのか。小6が入ることによって、中学生の部活動の足を引っばることにならないか。ただ、やらないことには始まらないので、希望制でやることになった。

アドバイザー

その取り組みに、小学校の先生方はどんなふうにかかわるのか。例えば顧問とか。

委員

今のところ、職員室待機。まだ深く決まっていない。ゆくゆくは小中が一緒になったときに、部活動の指導をすることもあると思う。もう一つは、部活動まで小学校の教員がやると「桜一貫校の小学校の部に来た先生は中学の部活動も見なければいけない」という話になるとどうなのか、現実的には問題になっている。そのへんもふまえてやってみて、またご報告をさせていただきます。とりあえず小学校6年だけで、月の最初の1週間ずつ参加。11～3月で。

部長

課題はいっぱいある。しかし、体力ということを考えてせっかく小中一貫の中で子どもたちを育てていくのならば、部活動は大きい要素だと思うので、切り離すべきではないのではないかと。小学校の段階から専門的なスポーツに親しむ機会を一貫教育の中でやっていくならば、中学校2、3年になったときにかなりレベルアップが図れると思う。小6と中3とでは体力的な差が大きいという指摘はあるが、今の1年と3年のように、少し早めの6年生から段階的な指導、発達段階に応じた指導を部活動の中で図っていけば、危険性はそれほどないのではないかと。

下校時間の問題も、今までの既成概念から外れてスタートするのが必要な気もする。初めから入れておく方が、部活動も中に組み込まれているという感覚は持てるのではないか。

委員

そうすると、4年から6年のクラブ活動は一応残し、6年生から部活動に参加させていくという方向がいいのではないかという意見が多く出ている。

事務局

Ⅱ期という区切りで5年生からという意見と、6年生からという意見があったが、このあたりはどうか。発達段階を見て、参加させる時期として。

アドバイザー

5年生から参加すると、4年生だけが単独で組むクラブ活動が、本来の意義をまっとうできるのかという指摘を受けたときに説明つかないのではないか。

委員

だから、部活はクラブ活動とは別に考えるしかない。

アドバイザー

小中でやるのだったら、やはり早い学年から一緒にやったほうがいい。しかし、それを中学に丸投げするとか前倒しするようなやり方だと、中学校の負担感が増えるだけで、指導も変わらない。小学校の先生が部活動の現場に入ること、中学校の先生の指導観とか指導法がいいほうに変わらないと、一緒にやる意味がない。要するに、体力というとか何か筋力アップみたいなことをイメージされると思うが、そんな単純な話ではない。

委員

部活動を夜7、8時までやっている立場として。まずマイナス面は、部活動が全入ではないという現状で、小中一貫にしたときに全入にしていくのかどうか大きく分かれる気がする。本部会の中で、楽しみながらスキルや体力を高めていこうという部分と、現状の部活動はメンタルな部分も非常に重要視されている。メンタルな部分は、「楽しい」という領域からそれを乗り越えて目指すべきものがある。運動系の部活動なら、全国大会につながる大会がある前提で、競技力向上を目指してやっているのが現実である。やはり、部活動で何にねらいを求めているのか。クラブ活動での小学生にどの程度計画・立案力があるのか分からない。中学の部活動でも耐え忍んで我慢して楽しいという部分と、つらい部分が共存しながらやっていく部活動のあり方もあるので、それを小中一貫にしたときに整理しなければいけない。小学校寄りにするのか中学校寄りにするのか。現状の部活動をスライドすれば、中3にしてみれば重荷、何のメリットもない。学習指導要領を全部見たが、部活動は総則の部分と特別活動の部分に一部分載っているものと、中学校の保健体育科の解説書に述べられているだけ。文化部については触れていない。今5時以降まで活動する前提で話していると思うが、我々の勤務時間はオーバーしており、それをどこまで教職員と生徒に望んでいくのか。教職員ですら全員が当たっているわけ

ではない。

プラス面で考えると、運動嫌いとか運動をしていなかった子たちに少しでも経験させて、「運動って楽しい」とやっていく。小5では体力はないが、中2、中3でそういう指導が得意な子が出てくるので、ふれあいという場面からすれば底上げを図ることはいいことではないか。ただその掘り下げ方が、今の中学校の部活動の捉え方・考え方・ねらい方を、だいぶ変えないと厳しいのではないか。

部長

まずこの部会は、小中一貫ありきからスタートしている。マイナス面を十分頭に入れながらプラス面をクローズアップしていくスタンスでいくべきだ。せっかく小中一貫の連携教育、一貫教育の中でやるわけだから。子どもたちが小学校から中学校に入るときの興味・関心は、国・社・数・理・英の教科よりも「部活動をどこにしようか」という興味が強いところはないか。そう考えると、実際的に小6から部活動に入れる場合の子どもたちの興味・関心は、我々が考えているよりもかなり強い気がする。だとすると、子どもたちの欲求を満足させる一つのチャンスが小中一貫教育にある気がしている。だから、やはりマイナス面、課題面もいっぱいあるかもしれないが、前向きに捉えていく方がいい。あくまでも小中一貫教育だから、これは小学校と中学校の先生がタイアップしてやるべき。そのへんの連携、境目のⅡ期のところは非常に難しい部分だと思うが、子どもたちだけが交流するのではなく、指導者側でも連携の体制を十分に作っていかなければいけない。そのところで、今までの小学校と中学校の先生の考え方でどうしても線引きに微差が出てきてしまうが、グレーな部分というか、お互いにかみ合っている部分が出て、一斉に線を引くべきものではない。

委員

小6から行くとちょうどいいと思う。5年生は体験で見学とかを設定して交流を図っていくのも一つの方法である。私も中学校でバレーボールの部活を担当している。軽はずみなことを言えないが、正直すごく厳しい。交流することと一緒に部活動をやるのは、非常に賛成する。ただ、課題をうやむやにせずにやっていかないと、中学校の負担は非常に大きいのではないか。小学校の先生がどう中学校とタイアップしていくかと、グレーの部分をどうやって埋めていくか、それから時間の問題が指導者に対して出てくる。体力差にかかわって安全面の確保もしなくてはいけないし、場所の確保もしなければいけない。期間は週何回やるかと、あとは期間限定でやるとか。私も試合を控えて調整に入っているときに、小学校と合同でやるのは厳しい。それを安易に流して、課題をクリアにせずに前に進んでいくのは非常に危険。中学校の子どもたちが小学生を指導していくにあたっては、思いやりを持ったりプラスの点もたくさんあると思うが、課題だけはクリアにして前に進んでいきたい。

部長

私の認識として、練馬区の小中すべての学校で小中一貫教育を推進していくとは認識していない。今と同じ連携はありうる。ある一定に条件を満たされた学校が、小中一貫教育というシステムを立ち上げ、小中単独でやってきた教育課程のほかにも、プラスアルファの部分を見出そうというのが小中一貫校。だから、それは配属された先生方のご苦労だと思う。でも我々も小

中一貫のシステムと、今まで小中それぞれやってきた良いところ、悪いところをしっかりと認識して、小中一貫校のメリット、難しさを我々が認識して、メリットを最大限に生かすという考え方が一番いい。だから、学校がそういうシステムになったときに部活動の取扱い方はどうかというふうに切り替えたほうが、考え方としてはスマートになるのではないかと。

委員

今の意見に賛成。中学校の先生は、今現状の部活動の指導、システムをイメージしていると思うが、それも小中一貫では変えていかなければいけない。もし5年生からやるとなれば、中3と同じことはできないので、段階的なカリキュラムを組み、活動場所、内容を変えていかなければいけない。一番大きいのはやはり指導者だ。例えば中高一貫だと必ず中体連、高体連と大会は分かれて中学顧問、高校顧問がいる。そして指導者、補助の先生がついて多くの体制でやっていくので、小学校から部活動をやるならば小学校の先生も顧問として入るのがベスト。

それから学校規模の問題もある。例えば大きな学校で5年生からやると、キャパシティの問題もある。5年生は体験でイメージさせて、正式に入るのは6年からで可能だと思う。中学校の部活ではなくて小中一貫校の部活動ということを明らかに打ち出さないと。そうでないと、勤務時間の問題、小学校でも運動に精通した先生は何人かいる。それを生かしたいという先生もいると思う。ぜひそういう視点で小中一貫校の部活動のあり方を考える。それで指導体制とか環境整備に取り組むことで動き出した方がいいのではないかと。

委員

ここにスキヤモンの発育曲線がある。思春期という捉え方をしたときに、メンタル面で男と女と一緒にやって大丈夫な時期、抵抗感のある時期、それを乗り越えて一緒にやって協調、協力を求める時期とあると思う。今部活動で捉えている部分を、保健体育の授業とか教科体育まで踏み込んでいくと厳しい部分もあるのではないかと。中学校で連携という立場で考えたとき、やはり中学校に入った時期にこの部分にてこ入れして、効果を発揮する瞬間がある。それは、規律面とか集団として動く部分、約束事に関して、中学生になったから変わったという境界で指導している。部活動に関するとを思春期とかメンタルな部分の発育段階で捉えたとき、この時期には大人としての捉え方で指導した方がいい時期があるのではないかと。小5、6への指導の仕方の中3に指導しても通用しない時期がある。具体的にどこをその時期とするのか。

事務局

部活動に関しては、導入時期として6年生あたりが望ましいという意見。そして6年生のクラブ活動との兼ね合いは教育課程にもかかわるので、今論を詰めるのは難しい。ただ、その導入時期、重なる時期が6年生と見えてきただけでも一歩前進かと思う。

委員

次に、体力の向上部会で重視する指導項目としてどういう力を育んでいきたいか。例えば、キャリア教育では自己肯定感、自立心をはぐくむと出ているが、体力の向上部会としてはどうか、意見をいただきたい。

部長

大きく二つに分けると、やはり行動体力と防衛体力。それから、練馬区の体力に関する考え方が、運動するための体力と健康に生活するための体力と二つに分かれている。行動する体力をさらに二つに分けると、子どもたちが運動を楽しむ年代と、さらに深める年代で二つに分けた方がいい気がする。「運動の楽しさを味わう態度をはぐくむ」、これがⅠ期からⅡ期の前半。そのあと後半部分が「意欲的に運動に親しむ態度をはぐくむ」みたいな表現にすると、自立性とか自発性、運動に対する専門性、筋力面、巧緻性とか出てくると思う。もう一つは防衛体力で、「健康を保持増進するための態度をはぐくむ」としたらどうか。

事務局

語尾が「態度」より「力」のほうが、こういう力を高めていくというふうになると思う。

アドバイザー

「運動の楽しさを味わう態度」といってもいろいろな力がある。一つの力ではない。その下の桁として具体的な力が出た方が分かりやすい。「力」だと桁が小さくなりすぎないか。

事務局

大きな視点として、運動を続けるには楽しさを味わわないといけないところ。その楽しさを味わってさらに深めていきたい。もっと楽しさを味わいたいという段階の意欲的に運動に親しむ態度。そうするために健康な体を作らなければいけない。健康を保持増進する態度をはぐくむ。ここに食育等も含まれる。大きな括りとしてはいいと思う。

アドバイザー

要素は三つ。一つは心の部分。意欲的なこととかコミュニケーションの問題とか、新しい学習指導要領の言語活動の充実みたいなことも、その心理的な部分に入っていくと思う。二つ目が体力とか技能にかかわる部分。実際に体を動かすための力。そして三つ目は、知的なこと。食育とか健康安全、自分の体の仕組みについてとか、知識理解も大事だろう。

事務局

文言として「体力を高める」という言葉は今の中に入ってないが、このあたりはいかがか。

アドバイザー

心配しているのは、一般的に体力と言ったときに、相変わらず狭い概念を持っている人がいる。でも今、体力の考え方はもう少し広い。だから「体力」と出さなくてもいいのでは。

事務局

次に1年次の報告書ということで、このような案を立てた。全部で8ページ。定義付けの部分が1ページ。各学習期における「目指す子どもの姿」で1ページ。それから全学習期を通じて指導する内容、体験させたい活動等がある。今体づくり運動から保健等まで提案いただいたものを体づくり運動、部活動等それぞれまとめて、実践例というか提案というかたちで示すこ

とができる。6番目として、部会で重視する指導項目。これが今、三つ挙げていただいたもの。それを小中一貫でどのようにはぐくんできていくかで1ページ。7番の体力の向上カリキュラム。これで2ページ分。こちらを分担して、それぞれ持ち寄って確認作業を進めていけたらどうか。今重視する指導項目を三つ掲げたので、これがA3版の自己肯定感等の三つ。そしてそれぞれに、部活動はどこの枠に入るかとか、どこの時期に入るかを入れ込んで作成する。

委員

今のだと結構難しくないのか。またがってしまうところとか完全に線引きできないところとか。重視する指導項目はいいと思うが。それから、プロットの6番は順番がもっと上ではないか。あと5番からどうやって入れ込めたらいいのかをまとめた表は、もうちょっと体裁を考えないと指導項目とのリンクは難しくないか。

アドバイザー

確認だが、これから小中の一貫教育では、これは必ずやるのか、あるいは努力目標なのか、参考程度でいいのか。そもそもこの資料の位置付けはどうなるのか。

事務局

どちらかという、参考としてまとめたものを学校長に提示して、それをもって教育課程等を組んでいただくという位置付けになる。

委員

空欄のところはやらないということではなく、今当てはまるものを入れていった過程でこれができているということ。例えばI期1、2、3、4と埋めなければいけないのではなく、I期の中で1年生でも4年生でやっても。となるのか分からない。それが見えないと、体づくり運動を担当となったときに、運動の楽しさを味わう部分もあるし、意欲的に親しむというねらいもあると思う。健康の保持増進で日常化というのは体づくり運動もある。そうすると全部入ってしまう。さらに各学年でどんな運動に取り組むかとか、練馬区の運動課題もある。どう入れていいのか、難しい。

委員

どの部会も重視する指導項目という枠で入れることは決まっているのか。あとは全学習期を通じて学習する内容もこの表の中に入れるということなのか。

事務局

これはまた別途確認をしていかなければいけない。項目としては入る。

委員

例えば何か枠で囲って「体育・体づくり運動」と補足して、ランダムに入れていく形になる。今までやってきたように縦系列に、例えば学校行事で「〇〇」ではなくて、ランダムに入れていくことになる。

部長

ということは、縦ではなくて横で考えたほうが考えやすい。例えば体力部会では、重視する指導項目が三つあったとする。ある先生が小学校の1、2年生を担当するなら、その三つの項目をどういうふうに配列していくかと考えた方が、考えやすい。担当するところによって、入ったりダブったりしてしまう。例えば自己肯定感と自立心は2、3年生では特に取り扱わないで勤労観とか職業観のほうに重点を置くということ。だとすると、各学年系列で組み立てていったほうが組みやすいのか。

事務局

このあたりの組み方に関しては、今一度確認する。とりあえず大きなプロットとしてはこういうものがあるとことをご理解いただき、次回このプロットの割り振りでもいけると思う。

※ 次回日程：第6回 10月9日金曜日、15時30分
本庁舎 19階 1906 会議室